徒然草

家居のつきづきしく

兼好法師

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ。[1]

よき人の、のどやかに住みなしたる所は、差し入りたる月の色も、ひときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしく、きららかならねど、木立もの古りて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣[2]のたよりをかしく、うちある調度も昔おぼえて[3]安らかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くの工の、心を尽くして磨きたて、唐の、大和の、珍しく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽[4]の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき。また、時の間[6]の煙[7]ともなりなんとぞ、うち見るより思はるる。おほかたは、家居にこそ、ことざまは推し量らるれ。

後徳大寺大臣[8]の、寝殿に、鳶[9]ゐさせじとて縄を張られたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらんは、何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ。」とて、そののちは参らざりけると聞き侍るに、綾小路宮[10]の、おはします小坂殿[11]の棟に、いつぞや縄を引かれたりしかば、かの例思ひ出でられ侍りしに、まことや[12]、「烏の群れゐて池の蛙をとりければ、御覧じ悲しませ給ひてなん。」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺にも、いかなるゆゑか侍りけん。

（第一〇段）

1 仮の宿り　無常な現世での一時的な住まい。

2 簀子・透垣　「簀子」はぬれ縁、「透垣」は間を透かした垣根。

3 昔おぼえて　古風な感じで。

4 前栽　庭先の植え込み。

5 心のままならず　自然のままではなく。

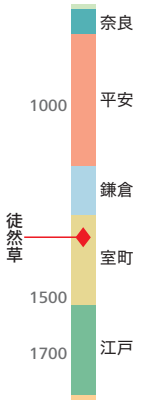
6 時の間　僅かな間。

7 ことざま　ここでは、その家の人柄のこと。

8 後徳大寺大臣　藤原実定（二三六～二二〇）。平安時代末期の歌人。徳大寺は北山（現在の京都市北区）にあった邸宅の名。

9 西行　一一一八年～一一九〇年。俗名は佐藤義清。鳥羽上皇の北面の武士として仕えた。二十三歳で出家後、諸国行脚の日を送った。

10 綾小路宮　生没年未詳。亀山天皇の皇子、性恵法親王。綾小路（現在の京都市東山区）にあった妙法院に住んだ。

11 小坂殿　妙法院の建物の一つ。

12 まことや　そういえば。